

第2回 上田市小中学校のあり方検討委員会 会議録

1 日 時

平成31年3月18日（月） 10時00分から11時50分まで

2 場 所

上田駅前ビル パレオ5階 上田市教育委員会 第1会議室

3 出席者

○ 委 員

委員 長	桜井 達雄
副委員 長	関 和幸
委 員	飯島 俊勝
委 員	金井 希巳枝
委 員	金井 律子
委 員	竹花 のり子
委 員	中川 智浩
委 員	中村 彰
委 員	早坂 淳
委 員	松本 千恵子

○ 教育委員会

教育 長	峯村 秀則
------	-------

○ 事務局

教育 次 長	中村 栄孝
教育 参 事	池田 隆
教育総務課長	石井 正俊
学校教育課長	高木 比登彦
生涯学習・文化財課長	小林 薫
教育総務課 総務企画係長	西澤 透
教育総務課 教育施設整備担当係長	平田 佳久

1 開 会

2 教育長あいさつ

3 委員自己紹介（前回欠席委員）

4 上田市小中学校のあり方の検討について（事務局説明）

（1）第1回検討委員会の概要

【石井教育総務課長】

「資料1」をご覧いただきたい。前回の第1回は初回ということで、まず事務局から検討委員会の趣旨、今後の検討の進め方、平成29年度に開催した上田市小中学校のあり方研究懇話会の提言書の説明、その後、質疑・意見交換をさせていただき、主に委員の皆さんにそれぞれの思いを述べていただいた。主な意見を何点か申し上げるが、2ページから3ページにかけて、大きな進め方の中で、基本方針を策定する段階から中学校単位で市民を巻き込んだ議論ができればというご意見があった。3ページから4ページにかけて、外国籍、あるいは障害のある児童生徒を地域で支えるという視点からの検討も大切であるというご意見もあった。また4ページで、成長する子どもたちのために決まったことは速やかに実施する必要があるというご意見、信州型コミュニティスクールを社会教育の中でどのように進めていくかという観点、また親が新たな子どもを儲けられるような制度の検討という観点からのご意見もあった。5ページから6ページにかけては、小中学校の校長先生のご意見が記載されてあるが、教員の働き方改革といった視点も踏まえて現場の教職員の声も大事にしてほしいというご意見や、6ページにかけて、保護者の立場ということもあるが、先生方とのかかわり、親と子の結びつき、あるいは学校との結びつき、このあたりをどのようにやっていけばよいのか、いかに近くするかというあたりが課題であるというご意見があった。6ページは、コミュニティスクールに関するご発言もあり、課題もあるが可能性を秘めているというご意見、また7ページでは、子どもたちが新しい道を切り拓いて力をつけてほしいという思いで議論をしていきたいといったご意見があった。以上が第1回の議論で、詳しくは資料をご覧いただきたいと思う。

（2）今後のスケジュール（案）について

【石井教育総務課長】

「資料2」をご覧いただきたい。全体の大まかなスケジュールを示している。これはあくまでも目安ということだが、例えば、第2回から第4回までのスケジュールには検討項目を掲載しているが、実際にはすべてが関連する内容ということである。単純に切り分けられることではないと思うので、トータルで考えていく必要がある。それぞれの回で、提言書の5つの柱を踏まえ、全体を見据えながら検討を進めていただきたいと考えている。また、本日もそうだが、すべてその回でそれぞれをまとめていくことは難しいと思うので、そこはあまりこだわらずに自由な意見交換をいただく中で、少しずつ意見を集約していきながら最終的にまとめていければと思っている。大変重要なテーマであるので、回数も含めてこの案のとおりでよいのかどうかということもあるが、議論を進めていく中で最終的には委員皆さんの総意のもと、基本方針が策定できるまでお付き合をいただければありがたいと考えている。

【桜井委員長】

ただ今の（1）と（2）について説明をいただいた。ここまでのご意見やご質問があればお願いしたい。

5 質疑・意見交換

【竹花委員】

「資料1」の会議録8ページについて、1点確認させていただきたい。教育総務課長さんが説明された内容とちょっと違うようにまとまっているのかなと思う。前回、附属資料の小中学校の児童数とクラス数の推移予測について、丸子地域の西内小学校が少し違っているように思えたため質問させていただいた。その回答が会議録の7ページと8ページにまとめていただいているが、主に8ページで、前回聞いたときは課長さんの説明のとおりで納得したが、この会議録では、2行目から、これは現年度までは今の数字で入っているが、31年度以降はすべて児童数を35で割って、単純に数値を予測して出しているという説明であった。それならば、西内小は31年度以降5クラスになっているが、この計算からいくと35年度、36年度と6クラスになる。前回の訂正では、31年度からずっと6になるという説明で、記載の注意事項のとおりで割ると6になる。これを読むと、西内小は31年度から32年度は5クラスでいいというようにとれてしまう。

【石井教育総務課長】

確かに、これだと35年度、36年度になると増えるような、そのように受け取れてしまう。

【竹花委員】

5ではなくて、30年度の今年ゼロの学年があったから5と書いた。その5に引っ張られてしまったというように課長さんがおっしゃったが、そこでたぶん次も5にしまったのではないかと思う。ここは単純に35で割ると6だと、それでそのように直させていただいた。ただ、私も小さなことにこだわるわけではないが、例えばこれから小中学校の適正規模の話がある時には、やはりこれは重要な資料になってくると思う。そのためにもやはりきちんと訂正しておいていただいた方がよろしいかと思う。附属資料のこのページだけでも正しい内容に直したものに差替えていただければありがたいと思う。この資料を参考に議論を深めていくという場面もあるので、そのあたりを再確認させていただきながらお願いできればと思う。

【石井教育総務課長】

前回の私の説明は、先ほど竹花委員がおっしゃられたような振り返りの内容でよろしいかと思う。

【竹花委員】

31年度から最後まで全部6クラスということか。

【石井教育総務課長】

そのとおり。

【竹花委員】

この会議録の記載だと、5クラスでいいととれてしまう。

【中村教育次長】

これについては差替えるようにする。

【桜井委員長】

前回の資料だが、話している内容は同じで一致しているかと思うので、そのように資料を差替えていただくということでよろしいか。

【竹花委員】

課長さんはそのようにおっしゃられたが、会議録にまとめられた内容は少し違うようにとれてしまった。

【桜井委員長】

資料は差替えるということで、それから会議録の方はどうするのか。

【石井教育総務課長】

会議録の方も訂正する。

【桜井委員長】

会議録も、誤解のないように訂正していただくことでお願いしたい。よろしいか。

○全員了承

【桜井委員長】

それでは、(1)、(2)あわせて一括してご意見をお願いしたい。では、特になければ次に進めさせていただく。(3)検討体系 ①「目指す子ども像『上田市として、どういう子どもを育てたいのか』」、(4)検討体系 ②「『上田市として』の特色ある教育」を、一括して事務局から説明をお願いしたい。

(3) 検討体系 ① 目指す子ども像「上田市として、どういう子どもを育てたいのか」

(4) 検討体系 ② 「上田市として」の特色ある教育

【石井教育総務課長】

「資料3」をご覧いただきたい。本日の大きなテーマは、①目指す子ども像と、②「上田市として」の特色のある教育である。「資料3」は提言書を抜粋したものであるが、この中にも具体的に書き込まれている部分もあるので、確認の意味であらためて読ませていただく。目で追い読みながら議論の参考にしていただきたい。

1 検討体系 ① 目指す子ども像

(上田市として、どういう子どもを育てたいのか?)・・・【教育の目標】

子どもたちは、未来の時代を創る大切な存在であり、家族・教師・地域の人など、多くの人々に出会い、支えられ、さまざまな影響を受ける中で成長し、社会を担う存在となっていきます。

そのため、「上田市として、どういう子どもを育てたいのか?」、そうした「目指す子ども像」について、学校・家庭・地域が共通の意識を持ち、連携を図りながら、子どもたちの教育に取り組んで行く必要があります。

子どもたちは、グローバル化の進展や情報化社会の到来などを背景に、予測困難な未来を生き抜いていかなければなりません。そうした子どもたちに、どの様な「①資質」、「②能力」が必要か、「小中学校のあり方」の検討に当たり、その出発点に明確に位置づける必要があります。

2 検討体系 ② 「上田市として」の特色ある教育・・・【教育の内容】

「検討体系①」の「目指す子ども像」を実現するため、「上田市として」どの様な教育を行う必要があるのか、特色ある教育の「①内容」、「②方法」、「③実施体制」について検討していく必要があります。

子どもたちが、上田地域の将来を担うため、そしてグローバルな社会に羽ばたき、全国、世界で活躍するためにも、故郷である「上田市という社会」を、歴史、文化、自然などの視点から、多面的に理解することが重要です。

また、市内高校3年生へのアンケート結果からは、将来上田市に定住を希望する学生は、地域での就業に関心が高く、「地域に根ざしたキャリア教育」の必要性を読み取ることができました。

学習指導要領に基づき「確かな学力」を養成しながら、子どもたちの「思い」を把握し、ふるさとに誇りと愛着を持ち、地域社会や全国、世界で活躍できる人材の育成に向け、市内の大学、企業とも連携しながら、「上田市ならではの教育」を検討していくことを提言します。

「資料3」はこのとおりである。まず、上田市としてどういう施策を展開しているのかをあらためて確認していただく必要があるとしている。まずはここで、上田市教育大綱、第2期上田市教育支援プランについて説明させていただき、共通の認識を持っていただきながら議論を進めさせていただきたいと思う。ご存知の方もいらっしゃると思うが、その内容について説明させていただく。

まずは、「資料4」の上田市教育大綱をご覧ください。上田市教育大綱は、「燦と輝く上田の未来を紡ぐ人づくり」を基本理念に、1ページは策定の趣旨ということで、1の「はじめに」と、2の「位置づけ」には、(1)の法的根拠がある。「地方教育行政の組織及び運営に関する法律の一部を改正する法律」が平成27年に改正となった。その中で、教育の大綱を作りなさいということが定められ、それに沿って作られた。上田市の教育、学術及び文化の振興に関する総合的な施策についての根本となる方針や目標を定めるものである。(2)の他計画との関連は、上田市の施策を進める上で最上位の計画となる「上田市総合計画」がある。ここにも教育関係の施策について掲げられてあるということ。また教育委員会それぞれの個別の計画がある。それぞれの共通の根本的な方針、目標とするものがこの教育大綱である。(3)の①の基本理念だが、人づくりのビジョンであること。子どもたちを中心に、すべての世代を対象とする。

2ページをご覧ください。計画の期間は平成28年度から32年度までの5年間とする。資料の中に体系図が記載してあるが、これは先ほど1ページでも申し上げた内容であるが、いちばん

上位の計画として「総合計画」がある。その下の左側に施策の目標については総合計画の中に共有の分野があるのでそこに記載されている。その中の基本目標は、「未来の上田市を支え、切り拓くのは無限の可能性を持つ子どもたちです。」「学ぶ意欲や生きる力を育み、夢や希望をもってたくましく自立する人材を育てます。」と書かれている。一方で教育大綱は、人づくりの方向性や目標を掲げたものである。「燦と輝く上田の未来を紡ぐ人づくり」を基本理念として進めていくことで、この2つの柱を上位計画に、個別の計画として、この後、上田市教育支援プランを説明させていただく。今回議論していただく小中学校のあり方については、この上田市教育大綱または上田市教育支援プランに基づいた中で議論いただくことが大きな前提となっていくと思う。

次に3ページをご覧ください。「1 上田市教育の基本理念」であるが、何度も申し上げているが、「燦と輝く上田市の未来を紡ぐ人づくり」ということで、その下に基本理念に込める思いが載っている。「燦と」は、上田市の「蚕都」の歴史、晴天の日が多い「燦々と輝く太陽（SUN）の日差し」に因んでいます。この伝統に培われた、自然豊かな、暮らしやすい「ふるさと」をいつまでも愛し、誇りに思いながら、人と人との絆を大切に夢・希望を持って未来の活力を生み出していく人づくりを目指す、ということである。その中の「2 教育各分野の人づくり・地域づくりの方針及び目標」では、学校教育分野に触れさせていただくが、方針については「将来の礎となる『豊かな心と生きる力』を育みます。」である。「人づくり」については、6点掲げている。

- ・課題を解決する力、自立する力を育みます。
- ・人の痛みがわかる、思いやりの心を育みます。
- ・物事に取り組む意欲や探究心を育みます。
- ・自分の考えや気持ちを伝える表現力を育みます。
- ・グローバルな視野とふるさとを愛する心を育みます。
- ・夢や希望を持って未来をたくましく切り拓く心を育みます。

このような目標を掲げたものが上田市教育大綱である。

次に、「資料5」第2期上田市教育支援プランをご覧ください。1ページは市の政策の方向性を示したものである。平成21年に第1期支援プランが策定され、現在は平成28年3月、平成27年度に策定された第2期の支援プランに基づいて施策を推進しているものである。2の「計画の性格」では、このプランは教育委員会だけで策定したのではなく、市長部局と教育委員会が合同で策定していることで、上田市教育大綱が示す学校教育分野の実行計画といった性格のものである。計画の期間は平成28年から平成32年度までで、教育大綱と同じ期間である。次に2ページは、先ほどご説明した内容と同様である。3ページは、教育支援プランの目標について書いてある。

下の方に「燦と輝く上田の未来を紡ぐ人づくり」に込められた思いを受け、

- 確かな学力を養う
- グローバルな能力を培う
- ふるさと上田に学ぶ

これら3つの基本目標を掲げ施策を展開するとしている。4ページは、「2 基本施策および支援策」で、基本目標を具現化するため、6の基本施策と14の支援策を掲げて支援を推進している。基本施策や支援策は資料記載のとおりであるが、後ほど簡単に説明させていただく。5ページでは、それぞれ基本施策の目標を記載している。6ページは施策の展開であるが、簡単に触れさせていた

だくので、後ほどの議論につなげていただければと思う。

「基本施策1 学力の定着・向上」だが、支援策1「学力検査・調査を活用した実態把握と授業改善及び学校評価を通じ、わかる授業、楽しい授業を推進」では、政策企画部、福祉部連携で取り組む。成果目標は児童生徒が基礎的・基本的な知識・技能やこれらを活用する力、探究心、人間関係形成能力等を身に付けられるようにする。主な支援策の展開は、①では基礎学力の定着、②では思考力、判断力、表現力等の育成などコミュニケーション能力の育成等について書いてある。以下、次のページの⑦まで施策が書いてある。8ページをお願いしたい。支援策2であるが、「ICTを活用した効果的な授業の推進」である。施策としては、教員が授業を効果的に活用できるようにするための研修や授業改善サポート、あるいはICT支援員の学校への派遣などを行うこと。9ページをお願いしたい。支援策3「学習習慣を身に付ける家庭学習の充実」、ここで記載してある、①学習習慣形成の推進は、授業と関連付けた家庭学習を行う習慣づくりを進めることで、家庭学習ノートについて触れている。上田市では、生活・学習ノート「紡ぐ」を昨年度から導入している。

10ページご覧いただきたい、「基本施策2 未来を切り拓く力の育成」ということで、支援策4「英語教科化への対応とコミュニケーション能力の充実」では、政策企画部との連携で取り組む。①小学校英語教科化に向けた取組、②外国語指導助手（ALT）を交えた実践的な英語授業について記載してある。11ページの支援策5は、「幼保小中高大の連携推進」だが、主な施策としては、①幼保小中高大の連携をさらに図っていくことである。③では高等教育機関との連携が書いてある。12ページの支援策6「キャリア教育の推進」は、すべての部局と連携による取り組みである。主な施策は、①学校におけるキャリア教育の実施、②では中学校の職場体験の充実ということで、実社会とつながる体験機会、発表の場等の充実について書かれている。

13ページは、「基本施策3 豊かな心と健やかな身体の育成」ということで、支援策7「豊かな心を育てる教育の推進」では、健康こども未来部との連携で取り組む。主な施策は、①では道徳教育について、また、情報モラルの啓発についても触れている。②では人権教育の推進について書いてある。15ページの支援策8は、「食育の推進」について農林部と連携で取り組む。主な施策は、①食育の推進と地産地消、②アレルギー対応について触れている。16ページの支援策9「体力づくりの推進」も、健康こども未来部との連携で取り組む。主な施策は、①体力向上の取組や②運動部活動の適正化について触れている。

17ページ、「基本施策4 すべての子どもの学びを支援」であるが、支援策10「いじめ・不登校など悩みを抱える児童生徒への支援」ということで、主な施策は、①いじめに対する取組の充実、②不登校児童生徒に対する支援体制の整備、③相談体制の充実について書いてある。19ページ支援策11「特別な支援を要する児童生徒への支援」は、市民参加協働部、健康こども未来部との連携で取り組む。主な施策は、①特別支援教育の充実では、インクルーシブ教育の推進、②では医療的ケアの必要な児童生徒に対する支援の体制について、③発達障がいのある児童生徒への支援体制の整備について、次の20ページには、④外国籍児童生徒への適応支援等の記載がある。

21ページでは、「基本施策5 地域とともにある学校づくり」として、支援策12「地域による学校支援の仕組みづくりの推進」について政策企画部と連携して取り組む。主な施策として、①コミュニティスクールについての記載がある。22ページの支援策13「地域を学び、地域に対する愛着を深める教育の推進」では、主な施策として、①ふるさと教育の推進について書いてある。

23ページ、「基本施策6 環境、防災、防犯教育の推進」では、支援策14「自然を守り、災害や犯罪から自らを守る教育の推進」について総務部、生活環境部、消防部連携で取り組む。主な施策は、①環境教育の推進と、②防災教育等学校安全の充実が書かれている。

以上、第2期上田市教育大綱支援プランについて、目指すものやどのような考え方で進めているのかについて簡単に触れさせていただいた。

【桜井委員長】

ただ今、(3)と(4)について説明をいただいた。たいへん密度の濃い内容であった。一度に理解することはなかなか難しいと思うが、ここで整理させていただくと、上田市の教育大綱があり、そのもとに支援プランがあって、3つの目標がある。これらを実現するためにはどうしたらよいかということで、昨年度「上田市小中学校のあり方研究懇話会」を開催し、5つの柱について懇話会の中で語られている。その5つの柱をこれから順次この委員会の中で議論していく。今日はそのうちの2つ、①目指す子ども像「上田市として、どういう子どもを育てたいのか」、②「上田市として」の特色ある教育、この2つがテーマとなる。そのような議論でよろしいか。

【石井教育総務課長】

よろしい。

【桜井委員長】

私の感想では、この大きなテーマ2つについては、昨年度の懇話会においても話されているが、「資料3」の「1 検討体系 ①目指す子ども像」は、懇話会での結論をもとにして、それに対するご意見や、どうしたらいいのかというご意見があったと思う。そして「2 検討体系 ②「上田市として」の特色ある教育」が、今日の2つ目のテーマだが、この2つを区切らずに進めさせていただければと思う。①はどうで、②はこうでと、おそらく領域がまたがってくるのではないと思う。進めづらい内容かと思うので、ご了解いただきたい。大きなテーマであるので、これから議論していく中でいろいろ具体化させていくための土台作りのような意味合いで、今日こういうことをやりましょうという結論ではなく、ベースになるものを皆さんで意見交換しましょうということと理解させていただきたい。よろしいか。それでは、フリートキングということで議論を進めてまいりたいと思うのでお願いしたい。懇話会で出された2つのテーマを目指すことこそ上田市としての特色ある教育であるということをお願いしたい。

【早坂委員】

私、所用によりこれで失礼させていただく前にひと言、事務局へお願いを1つさせていただけたらと思う。まず、意見についてだが、石井課長からお話いただいた検討の仕方についてというところで、第2期上田市教育支援プランを1つのベースとしながら、これから上田市の子どもをどう育てていくのかをテーマにしていくわけだが、上田市の教育支援プランは非常によいものに仕上がっており、これがベースになっていくこと自体に要望はないが、この支援プランが策定された平成28年の3月というのは、国レベルで教育のあり方についての大きな流れがあった時期と重なる。

具体的には、この前年の平成27年に文部科学省の中央審議会が、学校と地域の新たなあり方に

ついでに答申を出しており、この支援プランが策定される2か月前に、文部科学大臣から『「次世代の学校・地域」創生プラン』が策定され、そして、平成29年4月に社会教育法が改正され、学校と地域のあり方が大きく見直されることとなった。ご存じのとおり、平成29年3月に学習指導要領が改訂され、学校のあり方は広く社会に開かれた教育課程を開くという方向性に舵を切っている。

この大きな流れを踏まえると、なんとなく、この支援プランでは若干その流れに乗りきれていないことがあるように思われる。その点について意見を申し上げられたらと思うが、本日の資料では「資料3」が分かりやすいかと思う。この1枚に書かれている「資料3」には、キーワードが散りばめられている。例えば、検討体系①では、第2段落の2行目、学校・家庭・地域が「連携を図りながら」とある。また、検討体系②の下から2行目にも「連携しながら」という言葉がある。今、私が申し上げた平成27年から平成29年にかけての、学校と社会、地域のあり方における、国の教育の大きな流れからいくと、「連携」という言葉が古いというか、1つ前の時代の言葉に私には聞こえしまう。「連携」というのは例えば、学校と地域とか、教員と保護者という別の価値観を持った人たちがつながることを意味する。いわゆる足し算の発想である。先生の持っている力と保護者の持っている力を足す。ここで価値観が違うので、普通に足すと、だいたいぶつかって結構削られてしまっていて、お互いに10ずつ持っている力を足すと7とかになってしまう。「連携」とかはそういう発想で、連携の発想だとこれからの私たちの社会はこの国を維持できない、地域を維持できないので、「連携と協働」という発想がこの法改正であり制度改正である。

新たな「連携・協働」は、協力、コーポレーション、力を合わせていく「協力」の「協」に「労働」の「働」を使う「協働」という熟語である。「連携・協働」という表現に法律上すべて変わっている。学習指導要領の中でも、社会に開かれた教育課程の文言の中でも、「協働」という言葉が繰り返し使われている。「協働」は単なる足し算ではなく、全く違った人同士が対等の関係の中でお互いに影響を及ぼしながら新しい価値や、今までになかった何か新しいものを生んでいくという発想がある。力を合わせて分かりきった結果をみんなで成し遂げようという「連携」ではなく、これから社会がどう変わっていくか分からないから、私たちが持っている力を総動員して、複雑な社会に合わせて自分たちも変わっていくという発想がおそらく「協働」という意味合いに込められているのかなと思う。

これから上田市の教育支援プランをベースに議論していくときに、既に法改正等で使われなくなった言葉を使い続けると、時代の流れに合っていない言い方になりかねないと思うので、もし変えられるところがあるのであれば、「連携・協働」の表現で新たな価値を生んでいく組織体として我々の議論を進めていければよいのかなと思ったことが1点。もう1つは、自分からのお願いであるが、非常にお忙しい先生方、地域の方が集まった会議体で、我々の多様な意見がどれだけ多様なまま編み上がっていくかということが、この会議体の成功、その成果を決めるポイントとなる。今後も日程調整が難しく毎回は出席できない委員もおられると思うので、そのようなときに会議の場になくても気軽に意見が出せるような形に。例えば、資料を事前に配られていればとてもありがたい。2日前くらいに資料をいただいていると、目を通した上でこの会議に出席できる。この場で資料を見て説明を聞いて意見を述べるというよりは、事前にいただいた方がありがたい。欠席した場合でも、意見だけでも出せるような形を整えていただければとてもありがたいと思う。以上、これにて失礼する（退席）。

【桜井委員長】

それでは「協働」という言葉についてご意見があった。私も先ほど、つくられた時代背景の中でたいへん微妙なときだったのだなと思いながら、逆にいうと、その流れの中でこのような部分がつくられてきたのだとも思う。そのような意味で、専門家の方からみて「協働」という言葉を入れる

のがということについては、そこについては合わせましょうということでもよろしいか。本検討委員会とすればこのような言葉を使いながら、ということである。

【竹花委員】

1つよろしいか。早坂先生は社会教育委員会議のときも常に、連携ではなくて「協働」だということをおっしゃっていた。やはりそのあたりは変えられるものであれば、次第に国がそのように変わってきているとするならば、やはり「協働」という言葉に表せられるように変えていかねば良いと思う。

【桜井委員長】

言葉だけではなくて、意識して議論の中で、

【竹花委員】

言葉だけではなくて、意識して。

【桜井委員長】

言葉だけではなくて、議論の中でもそのような意識で。

【竹花委員】

言葉とともに意識である。

【桜井委員長】

早坂先生には、具体的に大変分かりやすい説明で教えていただいたと思う。参考にしながら進めていきたいと思う。確かに学校、家庭、地域で「連携しましょう」と言葉を使ってしまいが、その意識を高めながらこれから議論を進めてまいりたいと思う。目指す子ども像、どういう子どもを育てたいのか。上田市として特色ある子ども、このような議論を「資料3」にまとめていただいた。

ここの2つのどちらでも結構だが、文面で何かご意見はないか。それぞれの立場からの思いや、このような言葉があったけれど足りないとか、あるいはこういう思いを入れたいなど。昨年度の議論を思い出せば、上田市としてそこまでこだわる必要があるのかというご意見もあった。言葉と表現は違うが、同様のご意見もあった。それもごもっともであるという思いもある。フリーにお話しただければと思う。

【中村委員】

今、委員長がおっしゃった、必ず上田市としてということがあるので、であれば思い切ったことをやることも、やるということを取り込んでいくということでもよろしいのか。ということ踏まえて、どのような意見を出せばよいのか確認をさせていただきたい。

【峯村教育長】

上田市としてのということは私としては大事な要素だと思う。というのは、上田市の現状はいいこともあり、改善していかななくてはいけない現実もある。そこからロゴを出発させないと、どこの市町村にもあてはまるものになってしまうのではないかと思う。実態から出発して上田市ということへ持って行っていただくと、教育行政としても進めやすい部分があるのかなと思う。

【中村委員】

教育長の考えの中で、上田市として評価されるというか、素晴らしいことと、課題という言葉でよいのか分からないが、そのような部分があるかと思うという、具体的に言えば「そういうようなものを」というのが皆さんは、「どういうところがどんなふうに」とか感じていらっしゃれば、次へつながるような議論ができるのかなと思う。

【桜井委員長】

上田市の課題は何か、特色として進んでいる部分というか、これはいいなというのは何か。そのようなご意見があった。

【中村委員】

たぶん懇話会の中ではそういう話があったかもしれないが、ちょっと存じ上げなくて重複してしまうと思うが。

【桜井委員長】

大切なことだと思う。他にどなたか似たようなご意見等はないか。

【関副委員長】

例えば、先生の実践等、どこから話をしていけばよいか分からないが、ふるさとを知ることから上田の自分の地域のいちばん身近なことや歴史を知る中で、自分の地域に誇りを持つ。それをもって上田において上田を学んでいくことが大事だと思う。その対応について何かということはそのそれぞれの学校によって違うと思うが、やはり学校の歴史から入って周りのことを見て、知っている地域を広げていくという、そういう過程において何をするかということは、それぞれの地域を考えていくことだと思う。

【桜井委員長】

実際に、地域の活動や地域の課題に取り組み、進められている事例がある。私が聞いた範囲では、例えば、新聞に出ていたのが北小学校のキャリア教育。文部科学省からの表彰ということで、詳しい内容はよく分からないが、そのように地域の方たちと結びついた活動をされている上田は結構進んでいるのではないかなとの印象を持っている。このことで事務局の方、高木学校教育課長、いかがだろうか。

【高木学校教育課長】

北小学校の表彰の関係だが、子どもたちの社会的、職業的自立に向けて、必要な基礎となる能力や態度を育てることを通じてキャリア発達を促す教育とした表彰である。特に、北小学校が県教委から推薦をされた理由としては、1点目は、自己理解・自己管理能力を高めるための取組として、学校活動のさまざまな場面で「多様な大人」と相互に触れ合うことを通じて、人に対する関心や愛着を深め、信頼感を構築していく機会を凶っているということが評価された。具体的に言うと、北小学校でやっていることは5、6年生だと、それぞれ徒歩約40分圏内にある事業所へ歩いて行き、働くことの意味や生きる力を醸成していることで、あいさつやコミュニケーションといった社会力を作っていることがある。2点目が、1日だけ掃除をせず好きに遊んでいいという時間を設けている。キャリア教育につながる目標のもとで外遊びの時間を確保している。3点目として、4年から6年生までのクラブ活動があり、そこには地域の方々が講師で来ていただいて、指導をいただきながら活動に取り組んでいる。知識の習得だけではなく、地域の多様な方の人との関わりをもって人に対する関心や信頼感を養ってほしいとしており、いわゆる人とのつながりをねらいとしている。この3点が総合的に判断された理由である。

【桜井委員長】

先ほど出てきた地域の方々や地域との連携、協働という言葉かもしれないが、そういうような独学で評価されたところである。キャリア教育自体はそれぞれの学校でやっている。そこが特色になっている。他にこういう地域と何か結びついて活動をしている方は。今日は小中学校の先生方がみられないので、松本先生何かお願いしたい。

【松本委員】

「上田市として」とおっしゃっていたが、教育支援プランの「燦と未来の輝く上田の未来を紡ぐ人づくり」がイメージというのは、確かにグローバルな、ふるさと上田を学ぶことを挙げている。そして目指す子ども像というのは大きな目標になるので、しかも全体の小中学校のあり方の中で目指すものであるから、そこに「上田市として」ということが謳われなくても、その次に具体的な「上田市の特色のある」という、そのようなところに、具体的にキャリア教育の何々というものが謳われていくのかなと思う。その「目指す子ども像」というところは、例えば、他の市でも共通するかもしれないが、上田の実態からこうなんだよというものが出れば、かなり個性的なものはちょっと難しいのかなと思ったりする。それで、キャリア教育も大事だけど学校教育のことも入れなくてはいけない、そうなってくると、もっとイメージの大きいものが「目指す子ども像」になっていくのかなと思ったりする。

教育大綱の方を見ると、各分野の基本目標のほとんどのところが人づくり、人づくり、人づくりとメインになっている。こういうものを合わせてなおかつ、子どもの人口減少も考えて「目指す子ども像」というものを考えていかなければいけないのかと思ったときに、まだうまくまとまらないが、キーワードとして多様な関わりとか、多様な体験等をさせたいとすれば、例えば学校が小規模になったときにもっと大勢でドッジボールをするような機会とか、そういうところまで広まっていかなければいけないかなと思ったときに、目指す児童像というのは、育てたい子どもをイメージして考えたときに、多様な体験を通してということは外したくないなと思ったり、これを全部このように見たときに、人間関係の広がりということも大事にしていきたいとか。それからここには出ていないが、これを行うためにはやはりその子が豊かな自尊感情、己を大切にしている気持の自尊感情を大切に自分の感情を育てながら、学校教育がメインということになると、学び続けるというキーワードもほしいと思う。

そのあたりがうまくまとまらないが、最後は「豊かな心を持ち未来を生き抜く子ども」とすれば、

全部が統括されるかなとも。キーワードでちょっと考えてほしい。そうすれば、教育長さんがおっしゃっている、上田の子どもはイメージとしてはあるのだけれども、文言や活動としては「目指す子ども像」からちょっと外れちゃうのかなと思う。そこのところがどういう方向に向かっていけば、「目指す子ども像」というところの下の言葉が出来上がってくるのか、ここでキーワードを考えて悩んでいるが、ちょっとまだ意見がまとまらない。

【桜井委員長】

私も同じようなところで松本先生に整理していただきまとめていただいた。そのような想いで聞かせていただいた。そういう意味でも先ほど言った上田市の現実がどうか、もやもやしている状態で現実からスターするということで、中村委員がおっしゃっていただい上田市として評価をしてみるということで、その評価をすることで例えば上田市の特徴が出てくるかもしれない。あるいは他と変わらないものになってしまうかもしれない。とりあえず評価してみるということではいかがだろうか。限られた情報だがそれは、それぞれ豊富な経験をお持ちの委員さんが多いので、そのようなことから、足りない部分を浮き彫りにしてみてもいいと思う。

【松本委員】

上田市の特色のある教育の検討体系で、まず、イメージした子ども像に向かってどういう特色あるものが上田市ではできるのかというところで、今としては具体的なものを大切にしたいのかなと思う。

【桜井委員長】

委員の皆さんも関わっておられる学校と地域の連携と協働の場面というのは、上田市でも結構散らばっている印象がある。その一端が北小学校に出てきていると思う。

【飯島委員】

上田市としてどういう子どもを「育てたいのか」は、実際は「育ててほしいか」だと思う。そして、委員長がおっしゃっている、自分が上田市に住みたいという郷土意識が非常に大事だと思う。それがなければどこでもいいということなる。国が唱えた理想論をそれぞれの地域がどうやって具現化していくか。上田市に住みたい、そのような教育がされている社会環境がある上田市をどうやってつくっていくかがいちばんの基本だろうと思う。

学校、家庭、地域、それがやはり協働して子どもたちが育って、しかもまた1ターンでもUターンでも住みたいという地域をつくっていくことが大事なことである。ぜひ上田市ということは外したくない。だからこそ、前回の懇話会で言った小中一貫校をつくること。それを、しないはいいけれど過疎化が進んでいるところは先にやったらどうかとか、そんな話がちょっとあったと思うが、上田市という地域を考えないとそういう話は出てこないだろうと思う。ぜひ上田市としてはどういう子どもが育ててほしいのかという思いをつくってほしい。

【桜井委員長】

今、飯島委員の話を伺うと、上田市として全国で私しかやっていないということを見つける作業

ではなくて、上田市としてここに住みたい場所になれるような郷土愛、そういう意味で上田市を使っている、そういうことでよろしいか。そうするといろいろなものが、教育長、中村委員、飯島委員がおっしゃったようなことにつながってくるのかなと思ひながら聞かせていただいた。無理にではなくて、上田市だから全国でいちばんではなくて、現実立って上田市のいいところ、悪いところ、伸ばすところを探しましょうというような議論であった。逆の方で、ここが課題だなと思われるところ、皆さん保護者として学校なりを経験させていると思うが率直にいかがか。

【中川委員】

課題かどうか分からないが、私に小学校を卒業した息子と中学校を卒業した息子、4月から高校3年生になる息子がいる。それぞれの子どもたちを見ていると、とにかく基本はどうであろうとも上田市のことをどう思っているのだろうか、住んでいる地域をどう思っているのかは言えない。正直、子どもたちは授業とかで地域へ出て行きいろいろなことを学ばせてもらっているのではないかなと思う。それは実際に今の段階では、彼ら彼女らに響いていないと思う。そう見えないだけかもしれないが、普段話をしている中で地域の話は出てこないのが自分の実感だと思う。

P T A会長をやらせていただいた第二中学校では、二中フォーラムという取組みがある。信州型コミュニティスクールの一環としてそれを目標にして始めたもので、地域の方々、上田市で活躍する方々を先生として呼び出して、そこへ生徒と保護者が参加してその貴重な体験をさせていただくもので、例えば、武田味噌の方をお呼びして味噌づくりをさせていただくとか、小岩井紬工房さんで紬の体験をやらせてもらうとか、あとは貴重な音楽体験をさせていただくとか、里山の話で太郎山の話をしていただくなど、ずっと地域で根ざし活動していらっしゃる方々の生の声を聞く活動をずっと続けている。確かに体験することは楽しい、面白かったとは言ってくれるが、本当に今すぐにここから何人か発ったときに、子どもたちが大きくなったときに、じゃあ、上田はよかったね。上田はいいなというふうになっていくのかという不安はたくさんある。でも、続けなければそこで途切れてしまう。続けることが大事だということで、P T Aとしても今後も続けていこうということで、来年度の活動にも計画に入れていただくようにしている。私が今感じていることである。

【桜井委員長】

機会は与えているけれど、なかなか子どもたちの心には響いてないんじゃないかというご感想をもっておられることか。

【飯島委員】

それはちょっと違うと思う。やっぱり経験させることが大事であって、そこで子どもたちがどう思っているのかなど、結果を求めてやっているのであればやめた方がいい。ただ、今までのそういう楽しいことをお父さんがやったから楽しかったよっていうことをいかに伝えていくか、その積み重ねがあとに出てくる。それが私は教育であったり思いたと思う。ではそれをやめたところでどうなるか。いろいろな体験、あるいは学校生活、現場でいろいろな体験をする。これを結果が出ないからすぐにやめてしまったら何もならない。いいこと、悪いことではなく、大人がいいと思うことをたくさん体験させて、その積み重ねが郷土愛や本人の資質向上につながっていくんだろうと思う。

【中川委員】

私もやめしまったらということを行っているのではなく、飯島委員がおっしゃったように体験することはとても大事なことだと思う。その積み重ねがほしいというところを今後の重点課題として学校、PTAに求めたいと思っている。

【桜井委員長】

実感として子どもたちがどう入るのかという目線は非常に大事なことだと思う。体験をしてみて、もう少しこうだよというような想いがあればお願いしたい。

【中村委員】

この教育支援プランの説明を受け大変すばらしいと感じた。これが平成28年度からの5年間ということは、平成27年度中に策定されている。ここに掲げてあるいろいろなもの、いくつかの支援策があるが、平成28・29年度のこの2年間でどんなビジョン、あるいは平成30年度、わかる範囲で結構なので、約半分過ぎた段階でここに掲げたものがどうなっているのか、どういう方向性で今どのような状況なのか。数値があればそういうものでもよいし、そうでなければ教育委員会の皆さんが感じていることをお話しいただきたい。

【高木学校教育課長】

平成28年度から29年度までの進捗状況は出してあり、確認できているものがあるが、着手していないようなものもある。前進しているものでいうと、今の主な測定指標について印刷したものをお配りする。私を感じた中では、学力の定着と向上については、なかなか一朝一夕にはいかなく、一進一退だと思う。支援策2の「ICTを活用した効果的な授業の推進」は、各学校の教室に大型モニターが入っており、教科書を画面に映し出せる装置なども準備できており、平成31年度中には全教室に入ることと思われるので、そのようなものを活用していければ学力も確実に向上していくと思う。支援策3の「学習習慣を身に付ける家庭学習の充実」は、先ほど教育総務課長の説明の中で触れたが、生活・学習ノート「紡ぐ」を平成29年度に試行し、平成30年度から実施しており、活用していただいている。また基本施策2「未来を切り拓く力の育成」の中でも、新学習指導要領による平成32年度からの小学校3・4年以上の英語教科化に向け、上田市ではスムーズな対応ができるようにということで来年度から取組むようにしている。全くやっていないものもまだあるが、全14の支援策のほとんどが現在進行形で進めているところである。

【中村教育次長】

先ほど中村委員が言われた年度ごとの目標に対してどうなっているかということは、数値を出して検証している。担当の方から、主だったものをまとめた資料をお配りする。平成28年度から始めて、28年度末、29年度末についてはすでに結果は出ており、また平成30年度については、近いうちに再度検証する形になっているので資料をお配りしたい。

【松本委員】

私が現場にいた頃だと思うが、学校長がそれぞれの学校目標を立てるときにこの上田市教育支援プランの自分が立てた目標は支援策何番に当たるのか、そういうことを各学校で書き出したりしながら、職員の意識は非常に高くなって今やっている自分のこれと結びついているとか、ここが落ちているから力を入れなければいけないとか、そういう職員の意識や学校長の意識はすごく高まっており、これに向けてやっていると思う。それから家庭教育の推進というのも1つの項目だが、全学校で、家庭教育についてシートを出してそれぞれの担当がただドリルをやるだけではなく、日々つまづいたところを家庭教育でやるようにしようということで、数値的には分からないが、そういう意味で現場の日々の教育はすごく変わってきた。

【金井（希）委員】

支援策11の「特別な支援を要する児童生徒への支援」より、今回、保育園保護者に対するアンケートで要望が多かったのは、加配の先生を配置してほしい希望が多く、実際に現場の先生の教育意識はとても高まっている話であったが、保護者の方に特別な支援を要する児童生徒に対する知識というものが無いとか認識が無いことをすごく感じている。保護者に対しても必要なのではないかと感じており、特別な支援を要する児童生徒から不登校につながっている部分も実際に話として聞く。やはり現場だけでなく、保護者に対しても認識というものをもう少し与えてほしいと感じている。

【桜井委員長】

学校のいちばん近くにいる方なので大事なところである。そこはちょっと足りないことだと思う。

【金井（希）委員】

保護者の意見としてまだまだ足りていないのかなと思う。

【竹花委員】

先ほど飯島委員がおっしゃった「育てたい」というのはおこがましい、「育てほしい」が妥当ではないかとおっしゃって、私もいちばん最初にこれを見たときに、「育てたい」というより、やはり「育てほしい」の方が近い意見である。過日、社会教育委員でコミュニティスクールのことで横浜市へ視察に行き、そのときにやはり向こうでもどういう子どもを育てるのかをたくさん語っていた。私は教育のプロではないが、教育関係者の現場では育てたいという言い方をするのかと、今でも迷いはある。飯島委員の意見に賛成である。また、中川委員のおっしゃったコミュニティスクールの一環としてのキャリア教育の話で、それも横浜市の視察で話が出たが、コミュニティスクールの先進地で10年ぐらい経つてくると、やはりコミュニティスクールも学校のカリキュラムに一部入っている、やはりうまくは回っていかない話をしていて、いよいよこれからコミュニティスクールも本番に入っていく話があった。上田市はスタートしたばかりだから、やはり地道にやっていくが、ゆくゆくは10年ぐらいするとそういった形に行きあたるのかなと思うと、やはりカリキュラムに一部連携をしながらやっていけば、中川委員のおっしゃるようにもっと回るのかなと思ひ、

そこにコミュニティスクールの入る余地、未来が拓かれる部分があるのかなと感じた。飯島委員がおっしゃること、結果をすぐに求めないで長い目で見るとということも、親とすればやはりどうなっているのかなという部分も気になるところで、両方理解ができた。「育てる」ということと「育つ」ということは、教育者の皆さん、どのように考えたらよいのか。

【桜井委員長】

言葉にこだわると、確かに言われてみると「育てたい」というのはちょっと人の心まで入り込んでしまっているのかなという思いはある。ただ、どういう教育施策を、あるいは仕組みを施したいのかというところでこの言葉が出てきているのかなと。躰けるとかそういう思いではなく、ちょっと違う表現だった。地域と連携が上手くできている部分が多いのかなと思いつつながら、金井（希）委員のご指摘のように、いちばん近いところで情報交換ができていない実態もある。あるいはコミュニティスクールの話などのように、話すといろいろと見えてくることがある。まったく話がそれてしまうことだが、上田市は観光に力を入れていて、外国籍の方たちも多くおられる。そういう意味では、基本理念の2つ目で、グローバルな能力を培うことで、わざわざ2点目に謳っていることとなると、どのくらい、どんなようなことをされて、どんなような成果が出ているのかちょっとお聞きしたい。もし、上田市とつながるのであればということ。

【峯村教育長】

お答えになるのかどうか不安はあるが、この3つの基本理念、「確かな学力を養う」、「グローバルな能力を培う」、「ふるさと上田に学ぶ」は、私の個人的な思いではあるが、確かな学力は、先ほどお示めした資料の中にあり、まだこれは全国平均とかそのようなところへ達していない部分があって、今後、力を入れてやっていかなければならない部分である。グローバルな能力とは、これから社会、世界に対応できるというような意味合いが含まれていると思う。果たして英語の力をつければグローバルな人間になれるのかということ、そのあたり私は疑問を持っている。

【桜井委員長】

私もまったく英語教育と言っているわけではない。3つ目の「ふるさとに学ぶ」というところだが、これは今、各校でふるさと学習を展開している。とても大事な視点だと思う。子どもたちが世界へ羽ばたいていったとき、あなたのふるさとってどういうところですか、と聞かれたときに、きちんと説明できるそういう子になってほしいと思う。それは、郷土に誇りや愛着をもっているからこそ、大勢の前で堂々と言えるわけであり、それは元を返せばグローバルな力につながるものだと私は考えている。子どもたちの学びは抽象からは入れない。具体的なものを見て考えて、それで学習が深まっていくわけだから、「グローバルな能力」と「ふるさとに学ぶ」ということも重なる部分があるのかなと思う。

話は変わるが、今、上田市の現状から出発してということをお示し上げた。懇話会でまとめていただいた文面もそのようなところから出発していると思う。文面が一般的で、どの市町村にも適応される文面になってしまっている部分があったとしても、やはりここの委員会でこういうところを上田市は大事にして、こういうところをもっと改善していかなければいけないというご意見が

あっての上で、その文面が成立すれば、それはどこの市町村でも使えるとか考えなくてもいいと思う。これからも皆さんからいろいろご意見をいただくが、やはりご自分の感じてらっしゃる良さだとか、課題だとか、それから、10年後、20年後の上田市はどのようなのだろうか。そのときに上田市を支えてくれる子どもたちにはこういう力を持っていてほしい、そのような願いであってもいいと思う。

また逆に、教育は一人ひとりの自立を促す大きな目標があるが、その1人の将来の幸せを願ってどういう部分を伸ばしていくのか、それが先ほどの「伸ばす」ことにつながると思う。だから子を育てる、子の育ちを支援する、それから上田市の今後をどうするのか、みんなで知恵を集めて上田市の今後、20年後の上田市を想定して、こういう力をもった子どもがいてくれるといいのかなというような、そのような方向でお考えいただくのもありがたいと個人的には考えている。

【石井教育総務課長】

たいへん大きなテーマ、重いテーマで、こちら準備不足だと痛感している。今、いろいろなご意見をいただいた。これも私の個人的な意見の部分もあるので、それは違う、ということであればご指摘いただければと思う。教育長も10年後、20年後を見据えての話があった。教育大綱と教育支援プラン、今どういう現状があって、それに対してどのように持っていくのかという部分についてのものである。

今回、昨年度の提言書の中に特徴的なキーワードがいくつか出ている。それは中長期的な改革の方向性、社会の大きな変化を見据えて、とか、あるいは、次の時代を創っていく力、新しい時代に求められる力、大胆な発想の転換といったような言葉が何度も出てくる。教育長が触れられたように、これからの先を見てどういう子どもになってもらいたいのか、ふるさとを愛することを通して上田を盛り上げてもらうこととか、これから先どういう時代がくるのか、予測困難な時代の中で生き抜いていけるためにどのような力が必要なのか、といった少し先を見据えたことも考えながら、どういう子どもに育ててほしいのか、そういう視点を入れながら、目の前のことももちろん必要だが、少し先を見た視点での議論をいただければ、私は1つの考え方として、議論をいただく視点として必要だと思い発言させていただいた。

【桜井委員長】

私は大学の方で通学合宿というものに関わっている。金井（律）委員、ちょっと学校との関わりや現状についてのお話をお願いしたい。

【金井（律）委員】

武石地域の通学合宿というものに立ち上がった当初から関わっている。いちばん難しいのは時期を設定するところ、いつやったらいいのか、学校側の思いと準備する側の思う意図が、そこを擦り合わせようとしても難しい。まだ開催して2回だけだがやってみて感じている。武石地域の場合はこれからの段階だが、ここに来て公民館の建替えの問題が出てきて、その壁にぶち当たっている。これからどのようにしていくのか私も今考えているところではある。でも、子どもたちや親御さんが3泊4日子どもを通学合宿に出して、その親御さんの変化もあると思う。子どもたちの変化や

成長もあると思うが、親御さんの気持ち、何日間子どもといなかった、子どもが帰ってきた、そのところに大きな変化があると思う。そのところを期待していきたい思いはある。

私は武石地域から出てきている。上田市というものに対していろいろな部分で感じるものがある。大人もそうだが、これが15歳の高校生の子どもたちにとっては、これも1つの大きな経験ではあるが、上田市内にいない子どもたちにとってそこはすごく感じる場所である。

【桜井委員長】

金井（律）委員に話を振らせていただいたのは、私は山形村というところの通学合宿で関わらせていただいている。小学生と地域の方たちと私の方で大学生と一緒に関わらせていただき、そこから学校に通うということを1週間行い、その活動の中で子どもたちの変わり方がよく見える経験があったものだから、今のお話をお聞きすると、地域が学校を助けるというそんな場面があるのかなと思った。

【中村教育次長】

先ほどお配りさせていただいた資料を簡単にご説明させていただく。時間もないのでどのように見るかだが、グラフを見ていただくと、平成27年度、先ほどの教育支援プランの現状を見ていただき、そこから青い棒グラフが平成32年度へと伸びている。平成32年度、これは教育支援プランの目標年度ということで、それに向かって斜めに動いているが、その線の上にあるのか下にあるのか、平成28年度、29年度が必ずしも上にあるのはいいわけではなく、例えば、いちばん左上の「授業がわかる」と回答する児童生徒の割合については、小学校6年生が下にあるので、目標にやや達していないのかなということ、逆に中学3年生については、平成28年度は完全に上にあって、平成29年度は微妙だがちょうど線上にある状態である。それから、支援策7の1日1時間以上、携帯電話やスマートフォンを使用する児童生徒の割合は、これは逆に減っていく方が望ましいグラフであるが、いずれも上の方にあるということで、上にあることがあまり好ましくないことになる。実際には細かい数字が入った冊子を昨年度作成してあるので、場合によってはもう一度、平成28年度と29年度実績が入っているものをお出ししたい。

【桜井委員長】

そろそろ時間ということでお願いしたい。成果も大きかったが、貴重なご意見をいろいろといただいた。まとめきれずに、もやもやした状態で大変申し訳ないと思うが、それぞれのところで消化していただき、また次回へつなげていただきたいと思う。それでは時間なので、質疑等を終わりにさせていただきます。最後に次第の6について事務局からお願いしたい。

6 事務連絡

(1) 第3回検討委員会について

【西澤教育総務課長補佐】

小中学校のあり方検討委員会の日程の確認をさせていただく。この日程表については次回の第3回目の日程調整ということで、委員の皆さまのご都合を確認させていただきたい。第3回目については、5月中に開催したいと考えている。改めて5月中の日程を記載させていただいているが、ご都合の悪い日時について×印のみ記入いただきたい。ご都合のよろしい日時については、空欄にさせていただき○印のご記入は不要である。記入いただいた調整表については、返信用封筒にて郵送、又はFAX等で3月29日（金）までにご返送いただきたい。これをもとに第3回目の日程調整をさせていただき、改めて後日ご連絡させていただく。委員各位には、日程がなかなか合わないという状況の中、細かい微調整等でご連絡させていただくこともあるがご了承いただきたい。

【石井教育総務課長】

冒頭の方で竹花委員からお話があった今後の児童生徒数、クラス関係についてである。改めて今後の見込の児童数、クラス数の資料を配らせていただいた。西内小学校については、前回の説明と若干違う資料になって申し訳ないが、最後の訂正の部分で平成31年度は来年のクラス数を見て、それ以降については35で割った場合に1で余りができれば2クラス、余りがでなければ1クラスと単純な数字の出し方をしてあるとご説明を申し上げたが、今回若干違う出し方になっている。

上の方で、来入児以降の学級数は総数を35で単純に出して、線を引いてある。今回は住民基本台帳に基づいて、平成30年度の児童生徒数については推計ができるという中で、クラス数35人で1クラス、それが余れば2クラス、また、複式学級については国の基準があるが、県の基準もある。そのような基準に基づいて、実際に推定できるクラス数ということで現実に近い形で今回、平成31年度以降についても示させていただいた。そのような中で見ると西内小学校は、平成30年度に1つ複式学級になるので5クラス、平成31年度以降については複式学級が2つできることで4クラス。これは住民基本台帳に基づいて、今後の入学者の見込みの数を踏まえて採取したものになるので、平成31年度以降についてはそのように計算するとずっと4クラスになる。現実に近い形での推計ということで、あらためて出させていただいた。会議録についてはこれと違うことが記載されているが、その部分の正誤性はこちらで検討させていただき、どのように表現するかはお任せいただきたい。

【竹花委員】

小学校のいちばん下の備考欄の小学校1～35が1クラスとあるが、例えば、住民基本台帳でどの学校もギリギリ年度末まで増えるかもしれないし、減るかもしれないということがある（2から3になる、3から2になる）。それであれば、今現在の住民基本台帳で入れておいていただかないと、やはり転入があるかもしれない。今ゼロでも実際あるかどうかわからないけれど、あるかもしれない可能性があるとするれば、今ここで記載するのであれば、上の段の記載を消すだけではなく、何年何月現在、住民基本台帳から推計したと記載しておくような配慮が必要ではないか。

【石井教育総務課長】

そのあたりについては、できるだけ誤解がないような形で、必要な表現を追記させていただくなど検討したい。

【竹花委員】

適正規模という話となれば、やはり教育委員会から出された資料だとすれば議論していくことしかない。そのあたりは相談してみしてほしい。備考でもいいので何か入れてほしい。

【石井教育総務課長】

大事な話の部分になるのでよく検討させていただきたい。

【桜井委員長】

とりあえずはこの算出方法であるということによろしいか。

○全員了承

【中村教育次長】

いろいろ資料の不備が大変多く申し訳なかった。次回以降についてはできるだけ早く資料を送付させていただく。それでは以上をもって第2回小中学校あり方検討員会を閉会する。

7 閉 会